

第 2 回 小渋ダム水源地域協議会

中川村文化センター
平成 17 年 3 月 30 日(水)
10 時 00 分 ~ 12 時 00 分

会議次第

- 1 . 開会のことば
- 2 . あいさつ
- 3 . 議事
 - (1) 小渋ダム水源地域ビジョンの展開 (案) について
 - (2) 小渋ダム水源地域ビジョン実施方策 (案) について
 - (3) 今後の協議会について
 - (4) その他
- 4 . 閉会のことば

配布資料

- 資料 - 1 : 小渋ダム水源地域ビジョンの展開 (案)
- 資料 - 2 : 小渋ダム水源地域ビジョン実施方策 (案)

第2回小渋ダム水源地域協議会

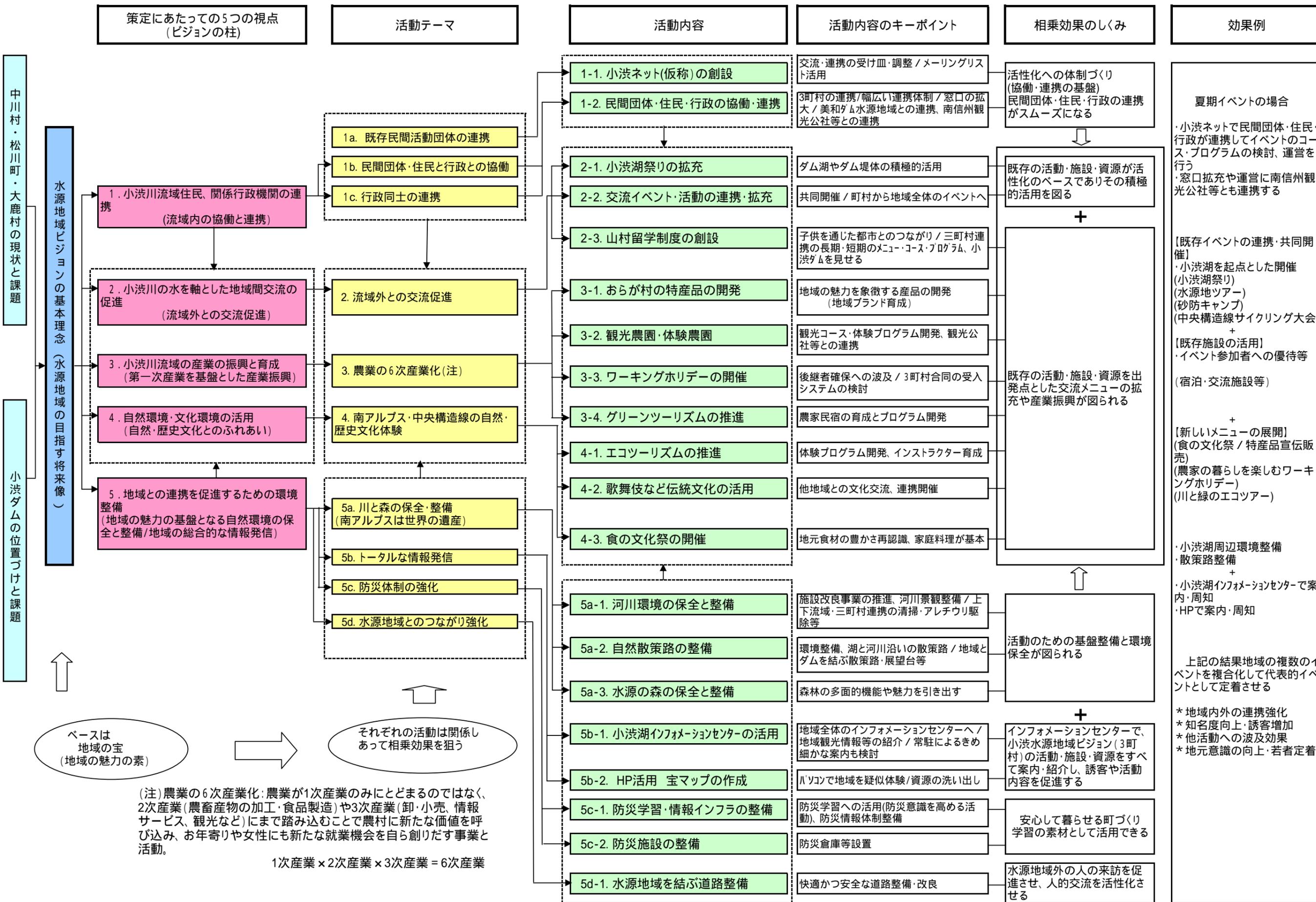
資 料

平成 17 年 3 月 30 日

目 次

資料-1	小渋ダム水源地域ビジョンの展開（案）	-----P.1
資料-2	小渋ダム水源地域ビジョン実施方策（案）	-----P.2

小渋ダム水源地域ビジョンの展開(案)



小渋ダム水源地域ビジョン実施方策（案）

ビジョンの柱 1 . 小渋川流域住民、関係行政機関の連携

活動テーマ 1 a . 既存民間団体の連携

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 小渋ダムに関係する中川村、松川町、大鹿村では、民間団体が主体となって自然体験活動、農業体験、地産地消、スポーツ活動、伝統芸能の活用、都市部との交流等が行われている。
- ・ 例えば、JC（青年会議所）が中心となり、青少年健全育成の一環として、中川村の自然探索や自然環境を守る活動などを行っている「少年ふるさと探偵団」（中川村）、四徳川沿いにある村営のオートキャンプ場・釣り堀を地元住民らが管理委託を受け営業をしている「オートキャンプ場・釣り堀場の運営」（中川村）、村道を利用してサイクリングを行う活動をしている「サイクリングクラブ」（中川村）、天竜川におけるあゆ釣りのクラブで、県内外の会員で構成されている「JAC（天竜川アユ釣りクラブ）」（中川村）、海のある町との交流行事で、祭りを通じての交流や相互に地場産品を持って行き来している「浜松市小沢渡町との交流（葛島・渡場地区）」（中川村）、遊休農地の有効利用や都市と農村の交流などにより、田舎暮らしや魅力あるふる里の構築などを目的として活動している「NPO 法人信州養命の里プロジェクト」（中川村）、春・秋に、村の男性グループが旬のものを山や川から獲ってきて、料理をして酒を飲む会である「うまいものクラブ」（中川村）、女性グループが五平餅を作る「五平餅の会」（中川村）、H16年4月に持ち上げた会議で、現在は片桐松川を活動拠点としているが、将来は小渋川も活動拠点とする予定の「川会議」（松川町）、神奈川県や大阪府などの高校生を対象とした「農業体験ホームステイ」（松川町）、千葉市の小学6年生が旅館宿泊やホームステイなどをし、村内のインストラクターに指導を受けて、様々な体験活動（農業体験、野外遊びなど）を行う「千葉市農山村留学」（大鹿村）、里山の保全と人材の育成や景観・環境の制度づくりに関する提案を行う「森と環境を考える委員会」（大鹿村）、上蔵（わぞ）地区内の遊休農地の利用、地産地消活動などで培った技を活かし、生涯現役で豊かに暮らすことのできる仕組みを地域につくることが目的として活動している「楽姓クラブ WAZO」（大鹿村）、点在する農家民宿や農産物直売所などが連携を強め、地域のグリーンツーリズムの充実を図る「この指とまれの会」（飯田下伊那全域）、飯田市と下伊那郡の18市町村と民間会社の出資により設立され、南信州の地域振興を観光という切り口から行っている「（株）南信州観光公社」等である。
- ・ しかし、これらの活動は各民間団体が個別に行っており、活動の相乗効果が得られているとは言い難い。今後は、これらの団体・活動の連携を図り、地域全体の総合的な魅力を引き出し、地域の活力を一層引き出していくことを目指す。

活動内容

1-1. 小渋ネット(仮称)の創設

< 「小渋ネット（Conet）（仮称）の目的 >

- ・ 「小渋ネット（Conet）」（仮称、以下「小渋ネット」と記す）とは、小渋ダム水源地域の住民・団体・行政が、それぞれの活動もしくは新たな活動の実施・連携・協働を促進するために、活動情報の共有、活動の実施・連携・協働方法の検討等を行うネットワーク(共同作業の場)である。

< 小渋ネットの想定会員 >

- ・ 小渋ネット参加者は、小渋ダム水源地域の住民・団体・行政、及び小渋ダム水源地域活性化の活動に参加(連携・協働)意向のある住民・団体・行政とする。

< 小渋ネットの運営形態と活動内容 >

運営委員会・専門部会・事務局

- ・ 小渋ネット内に運営委員会を設置し、必要に応じて「情報部会」などの専門部会を設けるとともに、具体的な組織運営を担う事務局を設置する。
- ・ 小渋ネット事務局には専従の担当者を置き、活動情報の収集や連携・協働の調整を行い、行政は支援する。

他地域との窓口

- ・ 小渋ネットは、美和ダム水源地域・天竜川関連の団体・行政等との連携などを行う際の窓口ともする

定例会と年1～2回程度のイベント・フォーラム

- ・ 運営委員会では定例会を行うとともに、年1～2回程度、小渋ネット参加者及び本水源地域活性化の活動に興味・参加意向のある個人・団体・行政が集まり、各活動の報告のほか、交流を深めるためのイベント・フォーラムを実施する。

ホームページなどでの情報発信

- ・ 事務局は小渋ネット専用ホームページを開設し、小渋ネット参加団体・行政及び本水源地域関連の活動や計画の情報を収集し、ホームページ等で公開する。

メーリングリストでの情報共有、意見交換

- ・ 小渋ネット参加者、並びに、小渋ダム水源地域活性化の活動に興味・参加意向のある流域内外の個人・団体・行政を対象としたメーリングリストを作成し、各種活動団体等からのイベント告知・報告、ボランティア募集、アイディア募集、意見交換等を配信する。

活動テーマ 1 b . 民間団体・住民と行政との協働 / 1 c . 行政同士の連携

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 当地域 3 町村では、民間団体が個別・単独に地域活動を行っているとともに、行政と民間団体との連携が十分行われているとは限らず、活動の相乗効果が得られていない。
- ・ 今後は、民間の活動を行政が積極的に支援すること、あるいは「民間ができること」と「行政ができること」を組み合わせることなどによって、地域の活力を生み出していく必要がある。
- ・ 一方、3 町村は上伊那・下伊那地域にまたがるため、行政が一体となって連携し、活動する機会が少ない。しかし、行政同士が流域単位で連携を図り、既存の活動や資源等を有効活用し、地域全体での相乗効果を高めていくことは、小渋ダム水源地域ビジョンの推進に向けて、不可欠な取り組みである。

活動内容

1-2. 民間団体・住民・行政の協働・連携

- ・ 3 町村の連携はもとより、町村と流域の各種民間団体、住民とのつながりをより深め、各活動の相乗効果が得られるような、また、新たな活動が生まれるような協働・連携体制をつくる。それは前述の「小渋ネット」の創設と、具体的な活動を始めていくことに他ならない。
- ・ 協働・連携とは、活動そのものを一緒に行うというだけでなく、それぞれの資源や施設の有効活用、人材の交流・相互活用、活動・研究等の成果の相互利用、ソフト面の役割分担等を、幅広く行うものである。
- ・ 対外的には、隣接する美和ダム水源地域や南信州観光公社等との連携を図り、活動の窓口や機会の拡大、活動の発展を目指すとともに、現在各町村や民間団体が行っている友好市町村等との交流事業等を、「小渋ネット」を核として地域全体に拡大していく。

ビジョンの柱 2 . 小渋川の水を軸とした地域間交流の推進

活動テーマ 2 . 流域外との交流促進

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 3 町村の行政、民間団体、並びに地域内に所在する国の行政機関では、既に流域外との交流活動を実施している。
- ・ 例えば、中川村の「地域活性化委員会」は、平成 2 年度に村の呼びかけにより発足した 3 地区（大草・葛島・片桐）の委員会で、景観形成、ふるさと再発見、イベント、伝統芸能、都市との交流などの取り組みをしている。ほかには、「アルプス展望さわやかウォーク」「もみじ祭り」等の交流イベント、中川村とふれあい協定を結んでいる名古屋市天白区との交流活動等が行われている。
- ・ 松川町では、ランとバイクを一人で行う「松川マウンテンバイクデュアスロン」を開催し、スポーツを通じた交流を行っている。
- ・ 大鹿村においても、中央構造線が縦貫する地域の 5 ヶ町村（高遠町、長谷村、大鹿村、上村、南信濃村）が主催し、南アルプスの谷間にある秋葉街道を自転車で走行し、多くの人に道路改良や砂防事業による地域の環境整備と景観を肌で感じてもらいながら地域の連携と活性化を図ることを目的とした「中央構造線サイクリング大会」が行われている。
- ・ 国においても、天竜川ダム統合管理事務所では、森と湖に親しむ旬間（7 月 21 日～7 月 31 日）として、ダム内部探検や湖内巡視体験等をメニューとした「小渋湖まつり」を開催している。天竜川上流河川事務所では、砂防を専攻または砂防に関心をもつ大学生等を対象として、砂防事業の意義・役割を理解してもらう「キャンプ砂防 in 天竜川」を開催している。
- ・ しかし、これらの流域外との交流活動の多くは個々に実施されており、活動の相乗効果が得られていない。しかし、「何のために流域外と交流をし、地域のどんなところを見て、体験してもらいたいのか（自慢したいのか）」などについて共通認識を持ち、開催時期の近い交流活動を連携させることなどによって、地域全体で流域外との交流をより活発にさせていくことが必要である。

活動内容

2-1. 小渋湖まつりの拡充

- ・ 現在催されている「小渋湖まつり」のダム内部探検、湖内巡視体験、物産展等に新たなメニューを加えるなどして、流域外との交流のさらなる促進につながるような活動としていく。
- ・ 新たなメニューとしては、ダム堤体やダム湖の自然を背景にした幻想的、非日常的な雰囲気をもった「小渋湖コンサート」の開催、また、後述する散策路等を利用した小

渋湖～小渋川～四徳川沿いや、町村集落から小渋湖を結ぶ、住民参加の「小渋湖マラソン」の開催などが考えられる。

- ・一方、「四徳」の名に^{ちな}因んで、水の徳とダム役割などについて、僧侶などを招いた「水の四徳」を考える会の開催なども考えられる。これは仏教において水には四つの徳（四徳：仁，義，勇，智）があり、それを人は見習い、足ることを知らなくてはならないとされていることをテーマにするものである。四徳川が流れる地で、こうした会を開くことは意味がある。
- ・さらに、「小渋湖まつり」と開催時期が近い、「中央構造線サイクリング大会」「キャンプ砂防 in 天竜川」「小渋ダム水源地ツアー」などと共同開催し、地域全体で魅力ある交流イベント・プログラムにして、相乗効果を図っていくことが考えられる。
- ・また、前掲「小渋ネット」が開催する年1～2回程度のイベント・フォーラムを併せて開催し、「小渋ダム水源地域ビジョン」の推進を象徴していくような交流イベントに育て上げていくことが考えられる。

2-2. 交流イベント・活動の連携・拡充

- ・各町村や民間団体などで個別に実施されている交流イベントに、インフォメーションセンターなどのダム関連施設を活用したり、小渋湖の自然環境を利用した新たなメニューを追加する。加えて、他の交流イベントとの共同開催等を図るなどして相乗効果を図り、より充実したイベントとしていく。
- ・例えば、時期を合わせ、地域全体で開催する「小渋秋まつり」(中川村もみじ祭り＋さわやかウォーク＋松川町りんご狩り＋きのこ等)、小渋湖を利用したメニューを加えた「小渋トリアスロン」(松川町デュアスロン＋小渋湖での水泳)、小渋湖の環境・景観を利用した「小渋桜まつり」(大鹿村桜祭り＋小渋湖)、町村の文化芸能や歴史をつないだ「小渋文化祭」(大鹿村歌舞伎＋中川村獅子舞等＋松川町部^{べな}奈獅子舞)など。
- ・小さなイベントが数多く個別に開催されるより、ひとつのテーマのもとに豊富なプログラムを、地域を広域的に活用しながら連携して展開する方が相乗効果が上がり、認知度の向上や誘客の増加につながると思われる。

2-3. 山村留学制度の創設

- ・山村留学制度は、都会の子供たちに、南アルプスの恵まれた自然環境の中で学んでもらう留学制度。
- ・三町村連携で里親等を募集し、1年程度の小学校での留学受入を基本とする。加えて、夏休みや冬休みを利用した短期留学や、地元小学校生徒と他地域(例えば海の)小学校生徒との交流留学等も検討する。
- ・受入体制は住民の里親に加え、「小渋ネット」参加の民間団体等に参加・協力を求め、それぞれの団体が得意とする農業体験、釣り、自然探索、野外遊び、郷土料理づくり

などのプログラムを体験してもらおう。

- ・また、自然体験・生活体験だけでなく、小渋ダムで防災やダムの役割について学んでもらうなど、水源地域の役割や大切さを学習してもらおう。
- ・こうした都会の子供たちを長期に受け入れる取り組みによって、その「親」との交流が図られるほか、受け入れた小学生は地域の潜在的なファンになってもらえるものと思われ、彼らが成人しても、繰り返し、地域を訪れてもらい、場合によっては地域づくりへの参加も期待できる。

ビジョンの柱 3 . 小渋川流域の産業の振興と育成

活動テーマ 3 . 農業の 6 次産業化

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 3 町村はもともとは第 1 次産業を主産業とした地域であったが、農林業における他地域との競争の激化（リンゴ、梨など地域的ブランド意識の変化）、担い手の減少と高齢化等の問題を抱えている。
- ・ こうした中、「農業の 6 次産業化」をキーワードとした産業振興への取り組みが考えられる。農業の 6 次産業化とは、農業が第 1 次産業のみにとどまるのではなく、第 2 次産業（農畜産物の加工・食品製造）や第 3 次産業（卸・小売、情報サービス、観光など）にまで踏み込むことで農村に新たな価値を呼び込み、お年寄りや女性にも新たな就業機会を自ら創り出す事業と活動のことである。（1 次産業×2 次産業×3 次産業=6 次産業）
- ・ すなわち、農産物を「つくる」だけでなく、「加工」し、訪れた人に「買ってもらったり」「食べさせたり」「体験してもらったり」して、農業の多面的な魅力を引き出すことである。3 町村でも既にこのような取り組みは展開されている。
- ・ 例えば、中川村の観光農園でのぶどう祭りやりんごの木のオーナー制度、ワーキングホリデーの開催、松川町のりんご・なし狩り、民間（味の里まつかわ）による地元で生産された農産物を使った加工品の製造・販売、大鹿村のブルーベリー狩り、食事処・豆腐工房・特産品加工所が一体となった「塩の里」などがある。
- ・ また、再掲ではあるが、遊休農地の有効利用や都市と農村の交流などにより、田舎暮らしや魅力あるふるりの構築などを目的として活動している「NPO 法人信州養命の里プロジェクト」（中川村）、上蔵（わぞ）地区内遊休農地の利用、地産地消活動など、培った技を活かし、生涯現役で豊かに暮らすことのできる仕組みを地域につくすることを目的として活動している「楽姓クラブ WAZO」（大鹿村）等の民間団体や、各町村の「観光協会」、前述の「（株）南信州観光公社」等の団体もある。
- ・ 今後は、これらの活動をより一層進め、農業を核としながら多面的な活動を行い、地域の産業振興につなげていくことが期待される。

活動内容

3-1. おらが村の特産品の開発

- ・ 地域の魅力を象徴する産品を開発し、地域ブランドとして育成する。
- ・ 各産業者や民間団体、各家庭が特産品の開発に努め、品評会を開催し、優秀な特産品については地域全体で商品化及び販売を支援する。
- ・ 例えば、地元で採れた食材（りんご・なし・ぶどう・ブルーベリーなど果物、ソバ、薬草、ハチミツ、山塩、大鹿大豆、チーズ等）を使った加工食品、流木や間伐材を利用した商品など。

- ・ 一方、特産品はその内容も重要であるが、地域ブランドとして育成するためには、商品化や販売での戦略、とりわけブランドイメージをつくるデザイン戦略が重要である。パッケージからコマーシャル、商品の陳列方法、販売店、配送の車まで含めて、全国区で通用するブランド戦略を立てるための、専門家を含めたデザインチームを結成する。

3-2. 観光農園・体験農園

- ・ 観光農業の地域を一層広めると共に、観光に供する作物の種類を増やして規模拡大を図る。
- ・ 三町村で連携し、地域全体で観光農園めぐりできるようなプログラム等も検討する。例えば、複数の観光農園・体験農園の共同チケットを設け、りんご、なし、ぶどう狩りが、地域を巡りながら、割引でできるようなくみが考えられる。
- ・ また、ただ採らせるだけでなく、農作業の過程や大変さをガイドするインストラクターや、収穫した果物等の加工体験ができるしくみづくりなども必要と思われる。
- ・ 観光農園や体験農園利用者にとっては味覚狩りや野菜づくりだけでなく、その環境や景観も重要であることから、必要に応じて施設のリニューアルも行う。
- ・ 既存の公共の宿、民営宿泊施設を拠点にする方法のほかに、宿泊施設などを備えた貸し農園（クラインガルテン^注）を普及させることも考えられる。（注：ドイツで 19 世紀初めに自給自足のために作られた小作菜園がはじまりで、現在では市民農園のことをいう。日本では、ドイツ語で「ラウベ」とよばれる宿泊・滞在施設などを利用し、長期滞在も可能な市民農園を主にこう呼んでいる。）

3-3. ワーキングホリデーの開催

- ・ 産業後継者確保の契機として、都会の人に農作業などを手伝ってもらおうワーキングホリデーを開催する。
- ・ 年間を通じて地域を理解してもらうため、四季の農作業に応じたワーキングホリデーを設ける。
- ・ 農作業に加えて、収穫した果物のジャム等の加工体験、郷土料理講習会など、交流イベント的なメニューを加えることも考えられる。
- ・ 受入農家確保などのために、三町村で連携した共同開催を検討する。

3-4. グリーンツーリズムの推進

- ・ グリーンツーリズムを推進するために、農家民宿の育成と意欲ある既存民営宿泊業者の確保そして体験プログラムの開発を行う。
- ・ まずは、住民に地域の自然・歴史・文化を活用したグリーンツーリズムの意義や楽しさを伝えるとともに、グリーンツーリズムに参加できるシステムづくりと受け入れ側の育成を行う。
- ・ また同時に、体験プログラムの開発やインストラクターの育成など、実施体制の整備に努める。その際、関連民間団体、3 町村、参加農家、参加宿泊業者も含めて検討するとともに、広域で活動する既存団体等から指導を受けることも考えられる。
- ・ グリーンツーリズム利用者受入については、諸団体と連携し窓口を広げて対応する。

ビジョンの柱 4 . 自然環境・文化環境の活用

活動テーマ 4 . 南アルプス・中央構造線の自然・歴史文化体験

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 小渋ダム水源地域は平坦地が少なく、急傾斜地が多い。しかしながら、山や川など自然が豊かで、地域の誇りとなっている。
- ・ 特に、南アルプスは、世界遺産級の価値を有している、我が国の誇りとも言える大自然である。
- ・ 本地域は、この南アルプス国立公園赤石山脈の山懐に抱かれており、信州側の登山口になっている。小渋川から南アルプスへの登山ルートは、かつて、ウォルター・ウエストン（イギリス人の牧師で登山家。日本における近代登山の父といわれる）により広く紹介されたという歴史を持つ。
- ・ また、本地域には日本列島を縦断する大断層である中央構造線が通っており、本地域の地形や地質も、その影響を受けた地殻変動により造られた。この特徴ある自然を学習してもらうため、大鹿村では「中央構造線博物館」が整備されている。
- ・ 一方、230年以上の歴史を持つ大鹿歌舞伎など伝統芸能も保存されているほか、各種の史跡、文化財が残されている。
- ・ また、そば、野沢菜、五平餅、干し柿、マツタケなど、風土に根付いた食文化も継承されている。
- ・ 今後は「地域の魅力の素」であるこれらの「自然」「歴史文化」を改めて見直し、地域住民が自ら楽しみ、訪れる人に「お裾分け」することによって、地域全体をいきいきとさせていくことを目指す。

活動内容

4-1. エコツーリズムの推進

- ・ エコツーリズムの推進のための体験型プログラムの開発と、ガイド・インストラクターの養成を行う。
- ・ 体験プログラムに活用する資源は、南アルプス、中央構造線、小渋川水源（ブナ林の古道等）、四徳川、小渋湖等が考えられ、これらの大自然の魅力を十分引き出すとともに、資源の保護・保全を考慮した内容とする。
- ・ ガイド・インストラクターの養成については、まず、そのシステム（講座開催、現地での講習、免許登録等）を検討するが、広域で活動する既存団体等に協力を求めることが考えられる。
- ・ 本地域は南アルプスの信州側の登山口にあたる。この南アルプスにはかつてガイドがいたが、現在はその数も少なく組織もないという。そこで、南アルプス登山も対象としたガイドの養成を図る。

4-2. 歌舞伎など伝統文化の活用

- ・ 農村歌舞伎など伝統文化を通じて、周辺市町村や他県との交流・連携を図る。
- ・ 歌舞伎・祭りなどの共同開催や他地域に出向いての交流開催、歴史文化セミナーの開催、芸能等の伝承者育成等での連携を行う。
- ・ また、地域固有の文化や伝統芸能等を改めて発掘し、住民がそれらを学べる環境をつくる。

4-3. 食の文化祭の開催

- ・ 各家庭が、地元で採れた食材を使った料理を持ち寄る「食の文化祭」を開催する。
- ・ これにより、地元の食材の豊かさを再確認するとともに、特産品開発の契機にする。
- ・ 「食の文化祭」は、前述した「小渋湖まつり」や特産品開発の品評会、また他イベント等と連携もしくは合わせて開催する。

ビジョンの柱 5 . 地域との連携を促進するための環境整備

活動テーマ 5 a . 川と森の保全・整備（南アルプスは世界の遺産）

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 小渋ダム周辺には人家がなく、小渋ダム周辺の更なる利用促進のための環境整備が望まれている。今後は、散策路の整備などにより、自然体験活動の場としての魅力を引き出すとともに、地域住民が協力して河川環境の保全を行うなど、流域の保全と活用を図ることを目指す。
- ・ 本地域には、南アルプス国立公園、天竜小渋水系県立公園が含まれており、前山としての伊那山地に重なるように、南アルプスの 3000m 級の名峰 13 座が素晴らしい景観を展開している。
- ・ 南アルプス国立公園は、多様な植生や固有種がみられる自然の宝庫であるとともに、地質学的にも多くの研究者が注目する地域である。
- ・ このような貴重な自然環境を将来にわたって保全する措置を講じ、南アルプスを世界的な自然遺産として魅力を高めていく。

活動内容

5a-1. 河川環境の保全と整備

- ・ 堆積土砂の排除のための土砂バイパストンネルを設置（施設改良事業の推進）する。
- ・ 上下流域・三町村連携での清掃・アレチウリ駆除等を行う。
- ・ 河川景観の整備として、花が楽しめる並木や園地を設置する。

5a-2. 自然散策路の整備

- ・ 周辺資源・施設（小渋ダム・四徳大橋・桑原キャンプ場・小渋釣場・桑原の滝・四徳森林体験館・四徳オートキャンプ場・峠地区の馬原山）と湖を結ぶ散策路を整備する。
- ・ 散策路は新たな道路を新設するのではなく、既存の道を散策路として位置づけ、必要に応じて改修や景観整備を行う。
- ・ また、散策路沿いの環境整備（展望ポイント・遊びポイント・サイン・安全施設等）を行い、小渋湖を望める展望施設を設置する。

5a-3. 水源の森の保全と整備

- ・ 水源地としての健全な森林の維持と管理を行い、森林の多面的機能や魅力を引き出す。
- ・ 本地域を含む南アルプス信州側は、広範に原生林を有し、自然環境の価値は相当に高いため、将来にわたって保全措置を講ずる。
- ・ エコツーリズム等の推進を図るために、必要な登山道の修復、整備を進める。

活動テーマ 5 b . トータルな情報発信

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 現状では、小渋ダム水源地域の情報発信が個別に行われている。
- ・ 今後は、地域全体の活動を連携させていくことを前提として、前掲の「小渋ネット」が中心となって、「水源地域ビジョン」の趣旨や活動内容などをトータルに情報発信するとともに、訪れた人を地域全体に誘導するようなしくみづくりが必要である。

活動内容

5b-1. 小渋湖インフォメーションセンターの活用

- ・ 小渋湖インフォメーションセンターを、ダムの案内紹介だけでなく、地域活性化・地域間交流・自然体験活動等に積極的に活用する。つまり、「小渋ネット」の活動拠点、ダムの学習や自然体験活動の基地として位置づけ、活用を図る。
- ・ また、地域全体のインフォメーションセンターとして、地域観光情報や小渋ネット参加団体の活動内容・イベント等を紹介する役割も担う。その際、よりきめ細かな案内のできる常駐者も検討する。
- ・ 現在、南アルプスのビジターセンターはないため、このビジターセンターの役割の一部(支所として)を担うことを検討する。

5b-2. HP 活用 / 宝マップの作成

- ・ 現在、各町村がバラバラに観光マップ等を整理しているが、これを機に各町村の資源を洗い出し、広域的に示す「宝マップ」を作成する。
- ・ 「宝マップ」の作成に当たっては、「小渋ネット」参加の民間団体等が、地元のきめ細かな情報を寄せ、単なる観光パンフレットではない、ユニークな資源マップとする。例えば、釣り、山菜狩り、自然探索に適した場所、サイクリングコースなど、地元に住んでいるからこそ分かる情報や自分たちの活動をやっていく上で自慢できる場所などである。
- ・ この「宝マップ」の作成作業を、「小渋ネット」の第一番目の取り組み内容にすることが考えられ、作業を通じた各団体の連携や地域の魅力の再発見が期待できる。
- ・ また、水源地域の案内・紹介(情報発信)を、「小渋ネット」のインターネット HP で行う。その際、地域を疑似体験できるようバーチャルな内容とする。
- ・ 内容は適宜見直し、新情報を発信する。

活動テーマ 5 c . 防災体制の強化

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 本地域は、水害に見舞われやすい地域であり、特に昭和 36 年の伊那谷集中豪雨（36 災害）では大きな被害が発生した。
- ・ こうしたことから、小渋ダム水源地域は防災の強化が望まれている。今後は、防災体制の強化を図り、「安心して暮らせるまち」を実現するとともに、防災を地域内外の人の学習に活用し、川と共生する地域としてのアイデンティティを高めていくことを目指す。

活動内容

5c-1. 防災学習・情報インフラの整備

- ・ 防災学習への活用として、防災意識を高める活動や防災情報体制の整備を行う。
- ・ 小渋川流域を防災事業の体験学習エリアとするため、防災に関する施設、事物を連携的に紹介する「小渋川流域砂防・治山体験マップ」を紹介する。
- ・ 防災情報体制は、流域世帯一戸一戸と情報のやりとりが可能なシステムの構築を目指す。とくに高齢者が多く、また、一人住まいの割合も高いため、きめ細かな対応を行う。
- ・ 小渋ダムの役割、小渋川沿いの治水、治山事業の目的と意義などをわかりやすく広報するとともに、地域住民の防災意識を高める機会を増やしていく。

5c-2. 防災施設の整備

- ・ 災害および地震大雨等異常な自然現象に起因して大規模な災害が予測される場合や発生した場合の建設機材、資材の確保・保管等のための施設を整備する。
- ・ 国、県、町村及び南部防災協議会（民間建設業者による組織）による防災倉庫等を設置する。

活動テーマ 5 d . 水源地域とのつながり強化

活動テーマの背景と趣旨

- ・ 本水源地域は、主要幹線道路及び他地域とを結ぶ道路網が少なく、狭隘かつ急カーブ・急勾配による冬季通行止の道路があるなど、周辺地域からアクセスしにくい現状がある。今後は、本水源地域へのアクセスが容易になり、地域外の人々も来訪し易くするための道路網が必要である。

活動内容

5d-1. 水源地域を結ぶ道路整備・改良

- ・ 周辺地域から水源地域を結ぶ国道・県道をはじめとする道路について、より快適かつ安全に通行でき、地域外の多くの来訪者を迎えるための道路整備・改良をする。